

善女人中

匠 瑳 探 訪

179

「善男善女」という言葉があります。広く仏教を信仰する人のことをいうとされ、江戸時代にまつられた石造物などの造立者に善男善女や「善女人中」などと刻まれたものが多く見られます。

善女人中や女人中の「中」は仲間のことで、村や集落ごとに多くの女性集団が存在しました。多様な石造物の中で女性講中による造塔は、「十九夜塔」、「如意輪観音塔」、「地藏菩薩塔」、「子

安尊」などで、石塔に佛像や文字が刻まれました。

旧八日市場市域では日蓮宗寺院の多い豊和地区、吉田地区、飯高地区を除いた江戸時代の40余カ村で100体ほどが確認されています。

写真は飯倉（豊栄地区）にまつられる如意輪観音像で、1824（文政7）年11月に飯倉村台谷と池端集落の「講中善女」によって建てられました。現在では判読しに

くいますが、像の上部に「死産の人を慰霊し、難産を取り除く」との願いが刻まれた珍しい例です。こうした小川のそばに建てられた供養塔（観音像は「流れ灌頂」といい、難産死した女性の霊を弔うための行事を行った場所とされます）。

調査した40年ほど前には、実際に流れ灌頂を行った事例を確認できませんでした。周辺地域に死産があったときなどには塔婆を立て供養したと聞きました。出産する時に母子が命を落とすことが多かった時代、切実な思いでこうした像に祈ったことでしょう。

今では流れ灌頂で新しい塔婆を見ることが少なくなりましたが、川の改修などでも失われることなく、女人の祈りが続いていることを感じます。

（市文化財審議会
委員・依知川雅一）

問 秘書課広報広聴

班 073・0080



飯倉の如意輪観音